

湿原・湿地への招待 2021

雨竜町 佐々木 純一

2021年、ライフワークの「湿原・湿地巡り」はいよいよ佳境、イヤ、苦行になりつつあります。湿原リストには「×」や「△」のサインが、知床二ツ池湿原、雷電山湿原、忠別岳湿原などは遙か山の上、大雪山系の銀杏ヶ原湿原、クワンナイ神々の庭湿原などは名前も魅力的ですが、「道」がありません。道東の風連川、当幌川などの流域湿地は橋の上からです。観察にはヒグマに乗ってヤブ漕ぎか、イトウに変身するしか術がありません。「湿地行ってます、水草やってます」、彷徨記は続きます。

晩冬の釧路湿原とタンチョウ

釧路湿原の雪も融けた3月中旬、鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ（鶴居村）に向う車道でタンチョウが邪魔をする（図1）。雑木林は寒々として、垣間見える湿原は植物たちの枯れ色で染まっている。鶴居の給餌場でタンチョウ親子らが餌をついばんでいる。突然の訪問に原田さんや櫻井さんらが迎えてくれた。タンチョウは優雅だが実はケンカっ早く、興奮すると頭の丹頂が色濃く拡大するそう（頭に血が上る）。縄張り意識が強くイメージとは大違い。今日は親29羽と幼6羽の計35羽を田島君が数秒でカウント、日本野鳥の会はスゴイ、お世話になりました。

阿寒湖に向うまわりも国道、林間のエゾシカは見飽きるほど濃密だ。阿寒湖はまだ結氷して、双湖台は1mの堅雪を踏み、暗緑

の樹海に白い湖面が浮く。寄り道した摩周湖はお約束の深い霧と-1°Cの真冬、湖は何処だ。

シラルト湖の陽光に輝くヨシ原と水面に休む水鳥たち。細岡展望台はすこぶる眺めが良く、釧路川の蛇行から宮島岬にキラコタン岬と釧路湿原が全望できる。手前の灌木が伐採され、環境省も時には粋なことをするね。

タンチョウは分散期でペアを各地で見かけるが、堂々と横断するエゾシカたちに閉口だ。湿地の花サビタ（ノリウツギ）の枯れ花が残る、湿地巡り晩冬の陣・釧路阿寒でした。

主なき、乾き過ぎた松山湿原

連日の大雨警報発令中の上川北部地方。前夜のTVはどしゃ降りの旭川を映し出す。今日も青空に湧き上がる夏の積乱雲、雨具持参でゴゼンタチバナが咲く登山道で汗を流す。

湿原手前の残雪溪に、さすが標高795m。長寿の鐘を打ち鳴らして見渡す湿原の景観が何か違う。ワタスゲのぼたん雪に埋まり、緑のキャンパスに白以外の色がない（図2）。湿原は芝刈りされたように、植物たちの背比べがない。えぞ松沼畔の湿潤泥土は亀甲模様にひび割れ、シュレンケ帯のヤチスゲに小穂が全くない。ミズゴケは色褪せた黄土色で、そのまま標本となる程にカサカサだ。「嗚呼、松山乾原」、ピンクの蕾が

萎れたトキソウ、花のないホロムイイチゴ、草丈 10cm で並ぶコバギボウシ、何時から雨無しが続いているのか、完全に干上がっていた。

アカエゾマツ林縁のホロムイスケーハイイヌツゲ群落を、目を皿にして覗く。ヤマドリゼンマイ、ホロムイイチゴ、ミツバオウレン、タカネハリスゲ、イソツツジ、マンネンスギ、ワタスゲと脇役たちは揃っている、なのに主役が不在。私は確実に見ているはずだが、緑の葉だけでは識別できないだけ。2-4 個の吊り下がる小穂を持つ主役は見当たらず、目に入るのはホロムイスケだけ。小穂を出せないほどに生育不良の乾いた湿原、ダケスゲ、まだ見ぬ松山湿原の主。

浮島湿原 スゲの濃密談義

北方山草会観察会、上川町の美しい山地湿原で 5 年ぶりのご無沙汰です。入口遊歩道の階段の横にハクサンスゲとミノボロスゲがお出迎え、さらにハクサンスゲに似たスゲを取り囲む皆の衆のスゲ談義が数分間。ヒメカワズスゲでしたが、出発してまだ 20m です。

道すがらビロードスゲ、ハガクレスゲ、キンチャクスゲ、グレーンスゲ、オオカワズスゲが、湿原にヤチカワズスゲが生育する。姫蛙、大蛙、谷地蛙はスゲ属ですが、似た種をまとめた節の区分では各々が別の仲間です。カエルが好む湿った土地に生育するので蛙菅ですが、3種3様でした(図3)。

1 時間かけて着いた湿原は雨不足で乾いてひび割れた泥土に、前日の雨が浮いている。平年なら花の季節なのに、ワタスゲ

の白い果穂が揺れる中で他の花たちが少なすぎる。歩みの中でイソツツジ、エゾゴゼンタチバナ、トキソウ、ゼンテイカなど、池塘を飾るエゾベニヒツジグサまで 3-4 池塘で数輪ずつの寂しい彩りでした(図4)。

姿が特徴的なタカネハリスゲ、ヒロハオゼヌマスゲ、ミカツキグサにヤチスゲ、ホロムイスケの定番と、往復 3 時間で戻った駐車場で今日の 16 種目のスゲ談義。茎の先に小さな小穂、最下の苞に刺状の葉身があり葉の幅が 2-3mm のスゲはヒロハイッポンスゲと同定、絶滅危惧 1B 類 (EN) の希少種でした。湿原は色香が寂しかったけど、スゲ談義、濃密です。

海霧が育む、花の霧多布岬

花の湿原、霧の湿原と言えば浜中町の霧多布湿原。住民の生活とも近く、初夏、窓を開ければ湿原の風が流れ、前庭では特産のコンブ干しで汗を流す。花の湿原は 7 月にエゾカンゾウ (ゼンテイカ) の燈黄色に、8 月にタチギボウシの青紫色に染まると聞くが、私もこの色に染まってみたい。

7 月中旬、琵琶瀬木道でゼンテイカは名残の数輪だけ、ノハナショウブが緑の草原で映えるが、咲く花が少ない中で威風堂々としたシコタンアザミ (アッケシアザミ) (図5)。赤紫色のウェーブした総苞片と花色が魅力的で、茎と葉の棘が武器になる。エゾシカも食べないようだ。霧たっぷりの湿原でも今年は恩恵が少ないのか、乾いて寂しかった。

振り返ると嶮暮帰島に海霧がたなびき、霧多布岬に急ぐ。断崖が続く岬への道沿いにゼンテイカ、トウゲブキ、ヤマブキシヨ

ウマ、ハマエンドウ、エゾノカワラマツバ、エゾフウロ、シコタンキンポウゲなどのお花畑の中でオオハナウドやエゾノヨロイグサも海風を避けているのだろうか、低い背丈で並ぶから観察も撮影も楽（図6, 7）。海霧の寒冷紗に育まれる花の霧多布岬、湿原より楽しめます。

根室湾の湿地群と新種カリウスアザミ

霧多布から北太平洋シーサイドラインを東へ、恵茶人湿原はいつも放牧馬が沼畔で遊ぶ。根室湾に流入する、河口湿地を見比べよう。風連川、ヤウシュベツ川、西別川、床丹川、春別川、当幌川など、根釧原野を創造した人を寄せ付けぬ蛇行河川だ。

野付半島は約28kmの日本最大の砂嘴、狭い所は約50mでオホーツク海と野付湾が視野に入る。海に浮かぶ国後島、知床の山並みが、尾岱沼越に阿寒の連山と、遮るものが無い360度のパノラマ。しかし色彩が、野付ネイチャーセンターによるとエゾシカ食害でゼンテイカはかなり消失したとか。人馴れしたエゾシカは振り向くことなく横切って行った、人とシカの絶妙な空気感だった（図8）。

湿地巡り夏の陣・道東は標津湿原へ。高層湿原帯は発達したチャミズゴケのブルテ（小丘）が特徴で、イソツツジ、ガンコウラン、ヒメツルコケモモ、ヒメシャクナゲなどの小低木が玄人好みの湿原と言われ、華やかさは期待薄です。

湿原と木道繋がり伊茶仁カリウス遺跡から今年（2021年）に新種カリウスアザミが発表された。コバナアザミに似るが頭花はより小さく、総苞片が斜上から開

出するという。見上げる路傍に、頭花が下向きのカリウスアザミが咲く（図9）。木道を歩き、遺跡群のある雑木林にはヒグマの踏み付け跡が、道理で湿原センターでクマ除け鈴が貸与されるはずだ。

静狩湿原・大沼公園でホシクサ探し

長万部の昼食の定番は「かなやのかにめし」。湿地巡り初秋の陣・道南は静狩湿原へ。湿原は密度の濃いハイイヌツゲ、ヤチヤナギやススキのように伸びたヌマガヤとヨシを漕いで歩く。静狩湿原で初めての体験も高温少雨の産物だろうか。滞水凹地（シュレンケ）の水は乾き、ヒツジグサの葉やコタヌキモが泥土に張り付いている。本来は水上で涼しげなのに気の毒だ。色華は咲き終わりのサワギキョウとウメバチソウで、ムラサキミミカキグサは種子を放出していた、早すぎる。

乾燥した泥湿地でミカツキグサ、モウセンゴケ、ヤチスギランと混生するエゾホシクサをやっと見つけた（図A）。さらに別の湿原域で、同行した金澤さんが「あったよー」。どうやら生育地限定で、数ある泥湿地から宝探しだ。古くは北海道大学の舘脇操先生が、近年は富士田先生らが確認しているが、大人2人がうつむきながらウロウロと歩き回る。滑稽だ。

宿は大沼、金澤さんご夫婦のペンション風（かざ）。「かざ」は言葉が繋がる未来形を込めて、と聞く。2日目は大沼公園でホシクサ探索。原松次氏が1978年に採集したクロイヌノヒゲが北大標本庫にある。また高田順氏から20数年前の採集地を教えてください。金澤さんの土地勘は正確で、

しかし2人で探したが確認できない。生育地の沼畔は開発され、他所は使われない作業小屋とヨシ繁茂でホシクサ類の生育環境でなかった。大沼の繁栄と過疎、20数年の歳月は仕方ない。

函館の松倉川沿いの水田排水湿地で、ヒロハノイヌノヒゲが生育する(図B)。ホシクサ属は水田雑草とも言われるが、昭和時代によく見かけた「水溜まり湿地」が懐かしい。

日高路の湿地巡り

日高路は思う以上に遠く、様似経由でえりも百人浜へは340kmの道のりだった。途中、田中正人さんと待ち合わせて様似を案内していただいた。かんらん岩による固有な高山植生のアポイ岳。ホシクサ属のエゾイヌノヒゲもアポイの生育限定種だが、山麓湿地は夏の乾燥の憂き目で生育個体数が少なく、まだツボミ個体もあった(図C)。次に幌満峡を走り、減水した幌満ダムの乾いた泥土でクロイヌノヒゲが黒粒を突き上げている(図D)。湖底で夏まで過ごし、発芽から結実まで1-2ヶ月、1年草と言うが1ヶ月草の儂い生命を力強く生き抜いていた。

えりも百人浜は初見参、「何もない」が売りで探すにも手掛かりが…。8月の当会観察会はDr. ストップでしたが、HPの報告写真のサワトウガラシの影でホシクサらしき植物が、撮影地を教えてもらい参じた9月11日。小石泥土、砂礫地、泥湿地と海浜湿地らしからぬ処でいずれもシロエゾホシクサが生育する(図E)。2-5cmと短い花茎の先に白色や褐色の頭花を付けてい

る。

草もみじの百人浜で見覚えのない花、恐ろしく花付きが良くぼんぼり状となり葉も茎も隠すが、1つ1つの花は青い濃色の斑点があり、梅沢さんの花図鑑では絶対に採用されない形態のチシマセンブリでした(図10)。

2日目の帰路は勇払湿地を巡る。鶴川汐見に着くとエゾリンドウを撮影する人影が、何と本多さんだった(待ち合わせた)。汐見はホシクサ属のメッカだったが、湿地は砂採取業者の残土置き場となりヨシの繁茂で、昔の面影と共にホシクサ類も消えた。ただヨシ原を分け入った沼のヒツジグサが美しかった。それでも町外れの湿性凹地からミヤマヒナホシクサを確認した(図F)。

厚真竜神沼でヨシ原の泥土から弱々しいニッポンイヌノヒゲを、柏原東湿原は何と湿原全域を埋め尽くすコイヌノヒゲ(イトイヌノヒゲ)(図G)とエゾホシクサで黄緑色に染まる。各地で目を凝らして探し出すのに、花茎が30cm超のお化け個体まで現れた。生育環境で異なるこの違いは何なのか、ますます泥沼にはまるホシクサ属です。本多さんは「一人では一生行かない所を…」ですが、「ヨシを漕いで泥沼を連れ回され…」でしょうか。これに懲りずにお付き合いをよろしく。

幻のサロベツホシクサは…

湿地巡り秋の陣も佳境、道北・サロベツ湿原の幌延町側、通称下サロベツ湿原です。利尻山を背景に遠近法で、そこに見える湿原域だけど歩くと遠かった。辿り着いた湿原のシュレンケ帯(滞水凹地)は濁れて、

乾燥したミズゴケはスポンジの上を歩くようなフワフワ感で、足首まで沈むが長靴不要。咲く花は無く、やっと見つけた猫の額ほどの泥湿地で待望のエゾホシクサに出会えた(図H)。頭花のガク片は尖り、他産地より幅が狭く長く、変種サロベツホシクサとされた個体が脳裏を過るが…。この泥湿地は砂漠のオアシスで、私たちの失望は希望と変わった。

下サロベツ湿原の地形特徴は長大な湿地裂。泥炭層の地滑りで生じた亀裂で、細く長く深く、最長は250mを超える。亀裂は連続的に繋がり、焦げ茶色の水を貯め池塘となる。その湿地裂池塘縁の泥湿地で、ナガバノモウセンゴケ(図11)、ムラサキミミカキグサより小さいエゾホシクサが生育する。花茎は1cm以下なのに頭花は普通サイズのチビエゾホシクサ、何で。湿原は草もみじ、緑色はツルコケモモとガンコウラン、そこにチマキザサの地下茎は全域に生育域を拡大、湿原ではササの緑色が一番濃かった。

豊富・ポラリスの嶋崎さん、幌延・とんこり堂の稲垣さんのサロベツの賢者と、環境省の許可を得て探索した。湿原はチマキザサとヨシに完全包囲され往復20分以上漕ぎ続け、忍び寄る脅威、イエローカードだ。

猿払川流域、原始の湿地群

北オホーツク猿払村の山間を流れる猿払川は、激しく蛇行しながら流域に趣を変える湿原が点在して、全体で猿払川湿原と呼ばれるが最下流部は広大な浅茅野湿原である。

今回は中流域の三線沼湿原と丸山湿原に踏み入った。三線沼はアカエゾマツに囲まれた静寂の沼、ミズゴケマットにツルコケモモ、ガンコウラン、イソツツジ、ミカヅキグサ、ホロムイソグ、ヌマガヤ、ヤマドリゼンマイが調和する草もみじの三線沼湿原(図12)。

少し下流域に、樹林の小丘が丸山と呼ばれ、その周囲に丸山湿原が広がる。中心部は滞水凹地が連続して、ムセンスゲとエゾホシクサが生育するという。草もみじのシュレンケでヤチスゲ、ミカヅキグサ、ホロムイソウなどが枯れ色となる泥土にエゾホシクサを確認した。エゾホシクサの最北の生育地で、来た甲斐がありました(図I)。

三線沼は秘沼中の秘沼でネムロコウホネの開花と、丸山湿原のムセンスゲは枯れ葉で私には識別不能、来夏のお楽しみです。湿原の接近は難しく原始の面影を残すと言われ、立入るのはエゾシカとヒグマだけ。相棒の嶋崎さんは日大クマ研出身、さすがの私も一人じゃイヤです。

ぬかるみ泥土と火山灰泥土

湿地巡りも晩秋の陣、苫小牧と白老は五十嵐御大のお出ましです。トキサタマップ湿原は勇払湿地群でも1番の「ぬかるみ泥土」ですが、すぐにコイヌノヒゲ群生地へ。ハンノキ林を抜けた湿地域は、何とシカ道の泥土露出面にニッポンイヌノヒゲなどが生育する(図J)。日頃は花を採食して憎きエゾシカですが、シカ道泥土はホシクサ属には生育適地となり、集団行動が役立ちました。私はぬかるみを歩かずに済みました。

白老ヨコスト湿原は国道で分断され、海側の海浜草原と街側のヨシ沼沢地の二面性が楽しめ、今回は沼畔泥地で頭花が黒いミヤマヒナホシクサを確認（図K）。案内された白老萩野石山湿地は火山灰泥土一面にホシクサ類が黄金色に焼けています（図L）。土壤による枯れ色の違いでしょうか。実に美しい景観も、近い将来は太陽光発電に変わるのでしょうか、儚い定めです。

白老ヨコスト湿原で追試情報です。ヨシ原の中にホシクサ属とミクリ属が...、この両属と聞いて行かない訳がない。ヨシを漕ぎ、ヨシの城壁に囲まれた水湿地にタマミクリ群落が果実を付け林立、火山灰泥土にニッポンイヌノヒゲ、ミヤマヒナホシクサが混然一体の幸せの異空間。学生時代の懐かしい追試、今日の追試は合格でしょう。昼ご飯は「牛の里」で、ホシクサ行脚の一人慰労会です。

湿地巡りのフィナーレは、草もみじと黄・紅葉のニセコ高原へ。山麓は秋陽、アンヌプリの冠雪した頂は雲の中、大湯沼の湯けむりに黄・紅葉が映え、ダケカンバの白い樹形が絶景なのに、ヤマの天気は七変化。五色温泉は雪が舞い、パノラマラインの路肩に白い帯状の残雪が続く。神仙沼入口木道は5cmの積雪で気温0度、濃霧に浮かぶ紅葉は妖艶だけど、湿地巡りは既に初冬の陣だった。

ホシクサ属植物の同定を実施していただいた、秋田県の植物研究家・高田順様に感謝申し上げます、ありがとうございました。ホシクサ属、小さい植物体でも奥行きは深く、泥沼にはまっています。



図1 道路占有するタンチョウ
釧路北斗地区



図2 ぼたん雪のワタスゲ
松山湿原



図3 姫蛙菅と大蛙菅
浮島湿原



図4 エゾベニヒツジガサ咲く
浮島湿原



図5 赤紫の魅惑シコタンアザミ
霧多布湿原



図6 岬のお花畑
霧多布岬



図7 海霧とトウゲブキ
霧多布岬



図8 人とシカ 絶妙の空気感
野付崎



図9 新種カリウスアザミ
伊茶仁カリカリウス遺跡



図10 多花・チシマセンブリ
えりも百人浜

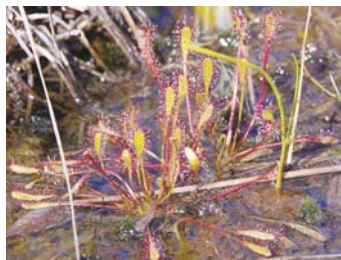


図11 ナガバノモウセンゴケ
下サロベツ湿原 嶋崎暁啓氏撮影



図12 草もみじの湿原
猿払川三線沼湿原



図A エゾホシクサ
静狩湿原



図B ヒロハノイヌノヒゲ
函館市銅山町



図C エゾイヌノヒゲ
まだ蓄 様似アポイ山麓



図D クロイヌノヒゲ
様似幌満ダム



図E シロエゾホシクサ
えりも百人浜



図F ミヤマヒナホシクサ
鶴川汐見湿地



図G コイヌノヒゲ雨に輝く
柏原東湿原



図H エゾホシクサ
下サロベツ湿原



図I エゾホシクサ
猿払川丸山湿原



図J ニッポンイヌノヒゲ
トキサタマップ湿原



図K ミヤマヒナホシクサ
白老ヨコスト湿原



図L 黄金色のホシクサ群
白老萩野石山湿地